

# 開館10周年を迎えて

伊東 祐之

## はじめに

新潟市歴史博物館は開館一〇周年を迎えます。それを記念して「大新潟湊展」と題して、湊町新潟の変化やしくみ、営みについて考える企画展を開催します。当館は条例で「新潟市の歴史的特性を明らかにし、市民の歴史に対する理解を深めるとともに、歴史を媒介とした市民交流を行うことにより、市民の社会的活動及び文化的活動に寄与する」ことを設置目的とすると規定されています。湊町新潟の歴史は、新潟市の歴史的特性を語るうえで欠くことのできない要素の一つであり、また、これからの文化創造やまちづくりの活動を進めるとき、その基底をなす認識の一つとして考えられてきました。そうした意味からも今回の企画展は、一〇周年を機会に調査・研究を進めて明らかにすべき課題であり、市民に理解をより深めていただきたい内容なのです。

## 1. これまで心がけてきたこと

当館では、この設置目的にもとづいて事業を組み立ててきました。消費経済が行き渡り価値観の変化や工業製品に押されて、地域の人々の営みを伝える生活・生産用具、文書、美術作品な



常設展示ジオラマのキツツォ「蒲原平野」特有の運搬具

どの資料が失われつつあります。当館ではそうした資料の収集・保存を図ってきました。このようにして収集された資料と既存の資料を合わせて調査・研究を進めることから明らかになったことを、館として企画展や講座・紀要などを通じて公表してきました。

例えば「蒲原平野」という地域概念を提唱したことです。建設時から検討し、常設展示にも反映されていますが、低湿地の人々が単に水に苦しみ、水と闘ったと捉えることに疑問を呈し、水辺の環境を活かした生活や生産を営み、特徴的な文化を生み出してきたことを強調してきました。さらに開館と同時期に行われた合併による新市域を

どう捉えるかという課題もありました。企画展で遺物や遺跡の分布の検討から信濃川・阿賀野川下流域を一地域としてとらえる試みや、江戸時代の新潟湊と内水面交通で結ばれた地域を新潟湊との関わり方を考えることなどを積み重ねるなかで、次第に「蒲原平野」という地域を設定することの意義が明確になってゆきました。低湿地での農業や開発の在り方を検討する企画展を開催し、その調査研究から、特有の農具や技術を共有する地域が浮き上がってきました。今後は「蒲原平野」の歴史的事象を具体的に検討し、その特性を明確にすることが課題となります。

また、湊町新潟の歴史の変遷を検討するなかから、近代都市新潟への性格転換も検討すべき課題となってきました。新潟町は、開港・明治維新を契機として、商業・流通都市としての機能に加えて、政治・行政・社会・文化の中心都市としての機能を持つようになったという視点を得ました。例えば、この視点から新潟町の花柳界について考えるならば、新潟の花街は、湊町につきものだったというだけでなく、近代以降の都市機能の変化に対応して存立基盤を変化させてきたことで続いてきたことが分かります。今後、この視点を深めて、全国的な新潟県の「裏日本化」のなかで「京都」新潟の果たし

た役割を明らかにすることによって、近代新潟市についてより豊かに語るこができるようになるでしょう。昨年の「牡丹山古墳」の発見も当館事業の成果です。民俗研究者金塚友之丞の収集資料を当館で保存・調査するなかで、金塚によって「牡丹山」と記された土器を埴輪の破片と推定し、それを展示することによって、考古学研究者や地域の人々の関心呼び、諏訪神社での他の破片の表面採集に結びつき、「古墳」の調査が始まりました。地域資料の保存が地域の歴史を掘り起こし、地域の人々のまちづくり活動にまでつながっていった例でしょう。

## 2. いたらなかったこと

しかし、ひるがえって見れば、実現できなかったことの方が目につきます。開館前から当館が主張してきたことに、「場」としての博物館ということがあります。館の活動を基礎に歴史を媒介に、館の職員や研究者や地域の人々、来館者、観光客など様々な人々が交流することを通じて、新たな文化的価値を創造したり、社会活動を進めたり、自己実現を図ったりする「場」となるという方針です。この課題に応えることは充分でなかったように思います。勿論、先に述べた「牡丹山古墳」の

ような例もありますし、多くのボランティアの方が当館で活動されていたり、敷地を活用して地域の方々が事業を行ったり、当館での見学や学習を活動のなかに組み込んでくださる団体などもあります。しかし、当館の積極的な関与・喚起の不足、多様化するニーズへの対応の遅れ、館の物理的な制限や人的な限界などもあって、「場」としての博物館機能は十分に働いているとは言えません。館と市民ともに博物館という「場」を活用する術を考える必要があります。地域を考える、地域で活動する人々からの求めに応じて歴史・文化の情報を提供するだけでなく、地域の人々が博物館という「場」で歴史の価値を発見・創造することができるようにしてゆきたいと思っています。

また、大きな課題となっているのが、常設展示の更新です。新市域の歴史的



市民が牡丹山諏訪神社境内で表面採集した埴輪破片

課題と現代社会の求めている歴史情報に考慮し、新しい展示技術を駆使して、新しい資料に基づいてリニューアルすることです。そのための検討すら行えていません。この検討は、実は常に行っていないければ、現実的にリニューアルが可能となったときに考え始めても対応できないものです。この検討を愚直に続けることが企画展示の企画や展示にとっても重要なことと考えます。

## 3. これから心がけてはならないこと

このように考えてくると、これから当館が心がけるべき課題が見えてきます。これから現在以上に財政事情や人員体制などが厳しくなることが想定されます。安易な途を選べば博物館の事業はどうしても一過性のイベントになってしまいう可能性がります。しかし、イベントでは消費されるのみで、博物館の資源となっていくきません。従来も心がけてきたことですが、ひとつひとつ課題を明確にして、資料を収集・保存し、調査研究を踏まえて、地域の歴史的特性を明らかにし、展示・公表することです。それによって地域の人々や研究者や資料所蔵者とのあらたな絆が生まれ、より深い関係ができていくのです。事業・活動を積み重ねてそれを体系化することが重要です。

さらに「場」としての博物館の機能を充実させるためには、館の発信力を高めて館活動に関する認知度を高める

必要があります。勿論、広報の仕方などに工夫が必要でしょうが、地域や市民が何を問題と見え、どのような活動をしようとしているのか、そのために何を知らなければならないかを把握することでしょう。そうした要望を踏まえて、館が活動し、館に関心を持つってもらうことが、大切でしょう。その意味で、重要になるのが、地域歴史博物館として、どのように地域と連携した事業・活動が行えるかということだと思えます。施設活用という現在の地域連携だけではなく、博物館の持っている収集・保存や調査・研究、教育普及、展示などの事業・活動そのもので、地域の人々と連携することが重要であり、その連携を発信していく必要があると考えます。

これらはあくまでも仮定ですが、例えば、地域の行事や民俗を保存したいと考えている人々とともに、行事や事業を調査・記録して位置づけを行う。例えば、まちづくりに地域の石造物を活用したいと考えている人々とともに、地域に残る調査・整理・研究を行い、資源として活用できるようにする。例えば、食文化を調査している団体とともに市内全域の行事食の献立を市民から報告してもらってまとめる。例えば、ある家の膨大な資料を市民を募ってデータ化して活用できるようにする、などなど。多くの個人や団体の持つ資金やマンパワーと、当館の保持する専門的な能力を組み合わせて、ともに活動し、その成果を博物館でも公表

## おわりに

簡単にいえば、みなとびあは市民の役に立つ博物館になるといふことだと思えます。市民がみなとびあとかかわること、地域の歴史認識を持ち、深める。そのことが市民の社会的・文化的活動を進める礎となる。単に景色がいい、楽しいことができる、美しいものを見ることが出来る場所としてだけではなく、市民にとって無くてはならない施設、機関、機能として市民に認知されること、今後、みなとびあが生き残り、進化していくために不可欠なことだと思ふのです。

(いとう すけゆき 副館長)